



雑魚



キヤラ道

川崎ゆきお

「雑魚キャラの生き方があるんですね」

野村はゲーム仲間の立川に話している。

「ほぼ全員そうじゃないの。殆どの人が雑魚キャラじゃないの」

「そう思いたくないのが人情だ」あ

「人情かァ、古いなあ」

「自分は特別な人間だと誰でも思うときがあるだろ」

「特別よく知っているっていう人間だよ」

「え、物知り博士解？」

「自分に関してだけね。だから、自分は特別だと思える。まあ、特別自分に関しては詳しいから」

「その特別に選ばれたような人間も雑魚キャラかい」

「客観視すれば、雑魚キャラばかりだろう。だから、君もそろそろ雑魚キャラとしての生き方を考えないと。チェンジしないと」

「ああ」

「まあ、しなくても、雑魚キャラだから、特に努力は必要じゃない。そのままだも雑魚キャラなんだから」

「しかし、大物もいるだろう」

「ほんの僅かね」

「ほらみる、雑魚キャラばかりじゃないじゃないか」

「一握りだよ。だから、僕らとは関係のない世界だから、雑魚キャラの生き方に徹する方が過ぎやすいんだよ」

「花も実もない雑魚キャラか」

「だからァ、そういう人が殆どだから、普通なんだよ。雑魚キャラで」

「面白くない」

「それは君の感想だよ」

「不愉快だ」

「だからァ、君は何様なんだ。君の愉快、不愉快なんて、何の影響もない。自分の気分を述べてどうする」

「じゃ、不愉快だっていうのは、誰ならいいの」

「大物だよ」

「うーん」

「ご機嫌取りが失敗して、大物の機嫌を損ねる。それを不愉快だと言われる。従って自分の気分なんて問題外」

「うーん」

「君にご機嫌取りをするような人はいる？」

「たまにいるけど、言うことを聞かせるために、機嫌を取ってくる程度かなあ」

「不愉快だよ君っ、てのも、立場のある人だろ。雑魚キャラの機嫌なんて、何でもないんだ。取

るに足りない。勝手に不愉快がってればいいんだ」

「辛そうだねえ。雑魚キャラは」

「愉快もそうだ。愉快がるのは何様のつもりだ」

「そうだねえ、でもいるよ。雑魚キャラのくせに態度のでかいやつ。それこそ何様だと言いたくなるような」

「きっと殿様のつもりなんだろう。偉い人間じゃないのに、偉そうにする。これは性格が悪いんだ。それに見合った地位じゃないと、全部空振り、空咳だ。態度のでかい雑魚キャラは虚しいよ」

「気位の高い雑魚キャラかい」

「それもあるけど、自分が雑魚キャラだと思いたくないんだ」

「じゃ、どうすればいいの」

「雑魚キャラ道を極めることだな。これは逆に言えば何も極めないことなんだ」

「はあ」

「極めるより難しいかもしれんのが、雑魚キャラ道だ」

「でも、雑魚キャラだろ。何をしても」

「僕らはゲームをしすぎた。英雄をやり過ぎた」

「英雄か」

「それをゲーム用語で村田英雄という」

「エイユウじゃなくヒデオか」

「そうそう、みんなエイユウじゃなく、ヒデオなのにね」

「じゃ、ヒデオに戻ればいいんだ」

「戻るも何も、一歩も出ていないと思うけど」

「うーん」

了